入選作家のひとりごと(順不同)

横田 昌明　　無言歌 Ⅲ

前作「無言歌Ⅱ」の対極にあるものをぜひ作っておきたいと考えました。 無言歌Ⅱを朝の挨拶major(長調)とすると雨降りの夕暮れのため息のような minor(短調)の小曲が据わり がいいと思ったのですが、焼成してからもしばらく手元において修復を繰り返し、無言歌Ⅰとは大きく異な るイメージになったため、無言歌Ⅲといたしました。向後も意図的にヴァリエーションを繰り返して、シリーズ をなす連作を試みていきたいと思います。

横田 昌明　　かみふうせん

台を含めてこの大きさにまとめたいと最初に考えました。3，4歳の頃の一番下の娘です。 夜店で買った紙風船に、つぶれないようそっと息を吹き込むのだけれどうまくふくらまず、高く打ち上げることはできないで、風船のようにしぼんだ顔をしていたのを急に思い出しました。しっかりと抱えようとするとしぼんでしまう紙風船は、子供の無心で儚い小さな夢のようで、いま、 形にして残しておかないといけないように思ったのです。

八木 虫三　　子どもの思い出

今はいなくなってしまった子どものことを思い出し、子どもの幸せを願って作りました。

吉良 幸弘　　観天望豊

昨今、木彫制作の傾向が『環境に優しく・木くずの少ない省エネ制作が着目をされている。』と耳にした。そこで、大きな1塊の木材を彫るのではなく、既に細分化された規制の小さな立方体のブロック片(桂一辺5cmや10cm立方体集成材)を、制作したい作品の形状に組み合わせ、そこから彫り進める制作方法を試みた。安定した彫りができるように、頭部に集成材の平面を 残し、振り返りの一瞬の表情を表現した。

吉良 幸弘　　ここにあるよ

1.2倍等身の裸婦像である。まず制作にあたり、人体のムーブメントを主題とし、複数枚の素描き・クロッキーから、主題となる ポーズを選定・決定して人体制作に臨んだ、特に、人体の重心の要となる足部の動きを底面に固定したイメージではなく、足部が動く始め動作から次の動作へと移行している形状をイメージし制作に臨んだ。また、頭部から足部の視線の移動時間を意識したポーズの時間差を意識して、全体の制作にあたった。

浅川 浩　　親子Ⅶ 牡羊

動物の親子(親子のつながりや愛情)をシリーズで制作しており、その8番目の作品。牡の羊の角の力強さと、牡の子羊のほんの少しだけ生えだしている小さな角から将来への成長を表現した。

柿崎 賢治　　幸せを願うⅡ

この世の中で、心の平静を取り戻し、生きている人間の美しさ・穏やかさを表現し、こちらの作品 を見て下さった方々が幸せになって欲しいという私の願いを表現した作品となります。

荻野 和彦　　こもれび

春の日差しに誘われ、裏山に足を踏み入れる。間伐された木立の間から、暖かいこもれびが差し込んでいる。なんと美しい光景か。自然と笑みがこぼれる。今自分は自然の中で生かされていると思う 一刻だ。

黒田 耕嗣　　ポチョムキンの階段 2025夏

1925年に制作されたセルゲイ・エイゼンシュタインの無声映画『戦艦ポチョムキン』で描かれた映画史上最も有名な6分間と呼ばれる『オデーサの階段シーン』に題材を得て制作した作品です. 時間軸 の座標を1925年から100年後の2025年に移し, ロシアによるウクライナ侵略を表現しています。

佐藤 邦子　　Women

向かい風の中の女性達を表現しました。

大河原 隆則　　ゲッセマネ

ローマ軍にゲッセマネの園で捕らえられる夜に祈りを捧げたイエス・キリストの心情をテーマにしています。この作品は、キリストの心情を頭像で表現しています。受難に対しての深い苦悩と祈り、恐怖、信仰等を表現し、人間の内面的な葛藤と信仰の力を象徴しています。素材は、ブロンズで、堅牢且つ柔らかく、その 孤独と犠牲、心情の複雑さを。素材、技法を通じて鑑賞者 に強い感情を呼び起こすことを目指しています。

宮田 瑞稀　　風にのせて

遠吠えをする愛犬の姿を作りました。お出掛けにおいてかれ、寂しくなった愛犬が遠吠えをして家族を呼んでいる姿を思い出しながら制作しました。

平中和美　　異素材の融合
異素材(木や金属、やきもの)は、それぞれの異なる質感・硬さ・色味・経年変化を 持つ。それぞれが意味を保ち、同じ空間の中で関係性をつくることで、そのものの美しさや融合する相乗効果で、素材同士が共鳴し合い対話をはじめる。また、単一素材 では得られない奥行きや新しい表現、空間の世界観が生まれると考える。

岡﨑 恵　　マオマオ
飼い猫のふてぶてしさを表現しました。

松原賢典　　エリア180 (平行)
社会的な関係性、人格があって初めて人間と呼ばれる。これまで、人と人の間に生じる存在をテーマとしてきた。肉体は朽ちても繋がっている心のあり様を、年月を追うごとに趣を増す陶や鉄の素材を用いて表した。エリア180 シリーズの第二弾。人間のもたらす超人的なシルエット。水平線と平行に広げた開脚と大地の狭間に新たな世界が見えてくる。

内田知佳子　　聾のフラメンコダンサー
生まれながら耳の聞こえない、伝説のフラメンコダンサーについてのドキュメンタリーをTVで見ました。決して裕福とは言えない環境に生まれ、耳が聞こえない事から来る偏見や差別を子供の頃からあびせられる。10代ですでにフラメンコダンサーとして有名になった彼女 は、インタビューアーからの「何が貴方をここまで踊らせるか？」の質問に、ひと言答える。「怒り」と。20代で踊る事を突然止め、行方もわからなくなった、伝説のダンサー。マグマの様な感情を抱えながら踊る、聾のフラメンコダンサー。何かを訴えるような、何かを見据えたような、その強い瞳とダンスに私の心は揺さぶられ、この作品にしました。

安 ちか子　　平和への心
平和が全ての営みの前提となりますように

田中　誠　　微笑む
羊毛をニードルで刺し固めて制作した彫刻です。ニードルには「かえし」がついていて、刺す度に羊毛が絡まっていって固くなっていきます。羊毛 は見ただけでその独特の暖かさだったり膨らみの感覚だったりを感じることが出来る素材だと 思っています。その素材の力を借りて、自己の持つイメージによる人体を制作しています。

前田 捷子　　深淵
深い淵を覗く。そこは「空」とか「無」の世界だろうか。わたしには分からない世界であるが、表わしてみたいと思った。制作に際して異質のものを組み合わせてみたいと考えた。葦簀を解体して材料を用意。葦の曲りをクランプで矯正し貼り合わせていった。切る際はきれいに切れず苦労した。初めての試みで多くの課題を見いだした制作であった。

横山普美　　波音 2025
静かな夜に響いてくる波の音から、果てしなく続く人生の厳しさのようなものを太平洋の大きさに感じる 。もし、一緒に暮らしていた家族が病気になったりいなくなったりしたときにも、人は過ごしてきた素晴らしい日々を心の糧にして、前向きに生きていくのだろう 。浜辺で見かける貝殻の螺旋、空洞 など波によってできた造形と家族を思う女性像を形を省いて一体化し波音を表現した。

仲田耕治　　志貫
若いニワトリが目標に向かって進んでいく姿

鹿之助萬蔵　殻を破り空間へ
新たな生命が殻を破り宇宙空間に伸びてゆく

大谷実佳子　　Blooming
モデルはダンサーの方でした。静かな緊張感と柔らかな表現力を備えた肉体が、時に開花する植物のようにも思われ、これから始まるパフォーマンスの予感と内省的な人物のイメージとを重ね合わせてみました。

川原孝文　　月光
毎回作品を制作する時に必ず自分にとって新しい挑戦を試みるようにしています。今作は上半身を透明素 材、下半身を不透明素材で造形しようと制作を進めましたが、並行して制作していた試作で透明素材部分が思ったような透明度と強度を得る事ができなかったため当初の構想が実現できませんでした。次回作への課題としたいと思います。

板垣信道　　モングラマングラへのエチュードⅣ (予感)
世界が始まった時の始原のエネルギーとでもいうものに想いをめぐらして彫り続けた。ノミが木と交感して，木の中に眠るその痕跡を探りあてる。そして、モングラマングラは、萌芽への予感の中にたたずんでいた。

長田圭司　　立つ女

ギリシャから続くミケランジェロ、ロダン、ブールデル、マイヨール、その延長線上にある作品が彫れたらと思う。それは調和であり、バランスであり、美である。彫り始めから終わりまで、中心線を出すのに各部を右に倒したり削ったり、左に倒したり削ったりの試行錯誤の連続だった。無意識に胴長で曲がった脚になり、自分の体型が嫌いなのに似てしまう。頭だけは小さい。不自然に見えるところを彫り、それを繰り返し完成させた。

野口茂夫　　"Temptation"

初入選以来ずっと裸婦を作ってきましたが、最初のモデルをコピーするような仕事から裸婦を素材として人体を作る事に移行してきました。きっかけは、都美術館での展示の時2Fから見て自分の作品と他の作家の作品が一瞬判別がつかなかった事に由来します。その時から自分が考えている彫刻の3要素、量感、動勢、比例を少しずつ際立たせて行こうと決 心し、創作して参りました。形を追求する中で有機的なフォルムが見つかりつつあります。今回の作品は、女性特有の'しなやかさ''艶'にも通じる形を表現したくて制作し、観る側に向かうベクトルを題名"Temptation""としました。

川崎 知子　　朧

取り除くことが出来ない残像。そのカタチを朧な強さとして表現したテラコッタの作品です。

早川　省　　ひかりたちの

街頭で真鍮のネームブローチを売るヒッピー達を見たのはもう半世紀も前のことでした。あの針金のはかなく輝き色褪せゆく時間が、生まれ消えて放たれる刹那の光となるようにと。

加藤彼方　　心鏡

この作品は「心は人を映す鏡」という言葉に着想を得て制作されました。他人の言動は自身の内面を映すものであり、作品は観覧者に自己を見つめ直す機会を提供します。淡い鏡のように反射するメッキ調塗装により、見る人の感情や状態によって印象が変化します。また、素材に使用された壊れやすいテラコッタは、心の繊細さや儚さを象徴しています。作品全体を通して、心の状態や変化に気づかせることを目的としています。

大西　求　　結び25-8

ふたつのかたまり(量塊)の出会いと繋がりで新たな空間世界(命)を生みだしたい

長谷川慈音　　待ちぼうけ

初めてブロンズで作品を制作するにあたって先生からブロンズは一生壊れないと聞いた。その時の一生に対する僕の思いは非常にネガティブなものであったため、1人でどこかに置いてきぼりになるブロンズに対して寂しい気分になった。しかしそれでもそれがどのような形で現れるか僕は見て見たかった。残してみたかったから僕はこの"待ちぼうけ"をつくった。頭部の突起は、いわゆるパンクシーンを生き抜いた若者の髪の毛を参考に作った。これの解釈は周囲に対する緊張感やそれを感知するアンテナのようなものだと感じる。そして座って待ちぼうけている。どこでも僕らを待ってくれている気がする。

蔵本保広　　1日1度の静かな時間

目の前の空・植物・地面と一体になる幸福な時間

大塚高司　　祈り2025

静かに祈りを捧げる姿

多田 裕　　core

地球のcoreからの引力により、人類は地上を垂直に立つことができる

志村ミサ子　　凛

彼女は造形作家である。また、民間の子ども美術館の運営に携わり、未来の造形作家を増やし育てる仕事に長年取り組んでいる。その姿に惹かれ、凛とした彼女の人間性を表現しようと作品制作に取り組んだ。

岡田　杏　　澤

今回の作品は、様々な技法を応用した自然素材によるアッサンブラージュです。テラコッタと数種の赤土をブレンドした上半身に、心を洗う滝を思わせるタッチを施しました。腕は寄木造り、腰から下はベランダ用の古材を使用し、異素材の共鳴を試みました。胸部の花の文様はテラコッタの風合いを象徴的に見せて、ドレスを纏ったような中性的な人の雰囲気とともに、千里眼の様に世の中を見通す不思議 な眼差しをしています。

ユンジェホ　　Life line: lotus

私は、すべての生命体がその大きさや知的レベルに関係なく、「生存本能」を持っていると考えています。小さな虫から人間、そして巨大なシロナガスクジラに至るまで、すべての存在は生き残るために本能的な力を発揮しています。それは、私たちの命を支える最も根源的なエネルギーであり、時に最後の手段でありながらも最善の選択でもあります。私がこの「生存本能」を最も象徴的に表していると感じた植物が「蓮(はす)」です。蓮は種の状態から、すでに硬い殻で自らを守り、泥や沼といった汚れた環境の中でも力強く花を咲かせます。一度咲けば湿地を覆い尽くすほどに増殖し、水面の上に凛と浮かび上がりながら、雨水や濁った水から自身を汚すことなく清らかさを保ち続けます。このような強靭な生命力こそが、すべての生命体に共通する「生存本能」の象徴であると私は捉えました。この作品では、その本能を視覚的に表現しようと試みました。蓮の茎は、上から下へと赤から黒に徐々に変化するグラデーションを施し、花の部分には鮮やかな赤色の塗料を使用しました。これは、生命が極限状態に追い込まれたとき、自らを燃やすようにして生き抜こうとする瞬間を象徴しています。対照的に、周囲の葉や根は黒い塗料で表現し、生存だけを意識するあまり、他のものに目を向けられなくなる状態を示しました。素材には木材を用い、赤と黒の塗料で生命の二面性すなわち、美しさと過酷さを同時に浮かび上がらせました。この作品を通じてすべての生命の中に秘められた激しいエネルギー、咲き誇る瞬間の美しさ、そしてやがて訪れる終わりの時間までも表現したいと考えました。

ルワゾー・ルン　　Between us / 私たちの間

"Two birds live inside me... freeing buried emotions... ... disguised as birds, messages appear... stars and flowers grow on the surface of the sky... between us, dreams become real" (翻訳)「2羽の鳥が私の中に住んでいます… 埋もれた感情を解放します… 鳥に変装し、メッセージが浮かび上がります… 空には星と花が咲きます… 私たちの間で、夢は現実になります。」

藤田結花　　明けぬ夜の待ち人

早く夜明けが来てほしい。呪いのような夜をぬけ、お日様の下に生きたい。夜が明けるまではここにいたい。なにかを作ることばかりが存在証明であると、信じていたから。これは絶望ではなく、希望前夜の作品。弱さを弱さのまま表現したこの作品が、誰かの心の琴線に触れられたら嬉しい。

鈴木紗和　　冥望

この作品は、「人の心の複雑さ」と「そこから広がる未来の可能性」をテーマとしている。切り株は、これまで積み重ねてきた経験の象徴である。人は誰しも、目には見えないけれど、多くの記憶や出来事を抱えている。そこから広がる根は、その経験から生まれる無数の感情や思考の道筋を表している。根は時に絡まり、時に分岐しながら、未来へと向かって伸びていく。私にとって根は"過去に縛られるもの"ではなく、"未来へ繋がる希望"である。その先端に金を施したのは、困難や暗闇の中にも必ず光を見いだせるという思いからだ。「冥望」という名には、深い闇の底からなお遠くを見つめるまなざしを込めた。作品全体が、人間の内側を静かに語りかけるような感情の彫刻となることを目指した。

さわべともこ　　記憶の向こう側 V´ 天空都市Ⅱ

平和な天空都市への道は険しく遠のいていくばかりである。虚しい地上の諍いは激しくなり、終末時計は核兵器使用リスクや気候変動の問題で過去最短の89秒を示している。制作にあたり、リズミカルに指を動かし平和を願いつつ、土と向かい 合い取り組む。道のりは遠いが陶土の白さ柔らかさで平和な天空都市を表現する。

佐々木言都　　寄せては返す

『寄せては返す』は私を形づけてきた人々、そして今も関わり続ける大切な存在への感謝と敬意を、波のかたちを通 して表現した作品です。人との縁は、寄せては返す波のように、出会いと別れ、支えと影響を繰り返しながら、私の内 面を豊かにしてきました。その循環する関係性を、渦を巻くように上昇する形態で象り、波の力強さを曲線で造形しま した。形の重なりや空間の抜けは、関係性の層の深さや、そこに生まれる余白を示しています。本作は人との関わり が絶え間なく続くことで、今の私が形作られているという実感を、形に昇華させた試みです。

小原史也　　角角

この作品は、「抽象彫刻とは何か」という事に悩まされ、考えながら作った作品です。私の中で抽象とは、具象から写実的要素を減らして行きながら、その作品を見た人がモチーフを想像し、理解することができるか否かの境界線に存在する概念だと結論付きました。そこでは私は抽象彫刻と具象彫刻の二面性を待つ作品を作り、抽象と具象の境界線を形に残す事にしました。タイトルの「角角」はモチーフであるサイの特に力を入れて作った具象部分の「ツノ」と、作品下部に向かうにつれて大きくなる「カド」の2つの言葉 をかけて、「角角(カクカク)」と名付けました。人口物と自然物、具象と抽象、ツノとカド、混色と単色など、様々な二面性を持たせた作品です。

佐伯　樹　　封膜

木という自然のものと、人工的で儚い素材であるパラフィンを組み合わせ、生命と時間、記憶の関係を表現しました。木の根の力強さは、過去から続く生命力を示しています。一方、半透明のパラフィンは、記憶や感情が時とともに曖昧になっていく様を再現しています。覆い隠しながらも透けて見える構造 は、奥に何があるのかという想像の余地を鑑賞者に与え、自然と人工、具象と抽象の境界を問いかけ ています。

松川美喜子　　微笑みの記憶

ここ数年記憶をテーマに制作している。現在世界では様々な場所で紛争や戦争そして、自然災害などにより人々に悲しみが広がっている人々は微笑むことを忘れない世界が平和でありますようにと祈る。無理がない動き、全てが自然に静止した中にも僅かな動きに希望の光を見る記憶からの旅立。自分一人がいるのではなく自分の過去には数えきれない人々がいたことに改めて感謝し、今を大切に生きねばと強く願う。

松川美喜子　　ドクターIの頭像

コメントなし

村上義彦　　s173

数学とコーディングを利用して抽象立体を作った。自然界の波や温度変化などの現象をもとに等値面(Iso surface)という計算方法を用いてモデリングソフトで造形し、3Dプリンタで出力した。自然のどこかに存在するいまだ可視化されていない関係性を具現化し、その不思議さを観客と共有したいと考えた。

田中太郎　　劣化

古い道具やおもちゃ、本等を久しぶりに出してみたとき、年月が経ち原型は残っているが経年劣化や保管状況が悪く色褪せたり、動かなかったり、カビや朽ちたり埃、汚れ、破損などをして残念になった気持ちも具体的な形(物自体の形)ではなく簡単な形で動きを少なくする事で静かに劣化していった様子を抽象的に表現してみた。

櫻井 昂　　ゆらぎながらも

まっすぐである必要はない　カタチを変え、ゆらぎながらも　私は生きていく　それでいい　それがいい

浮田麻木　　木片の馬

制作で発生する木片を集め静かに立たずむ馬の姿を造形した。

浮田麻木　　風の軌道ー麒麟

自然界に対する畏怖の象徴として語られてきた麒麟。暴風のその日木々の揺れ、流れる雲をみながら自分なりの麒麟を造形してみたいと感じた。

西井 武徳　　vanishing point '25 (バイソン)

素材から作品が生まれる瞬間の力強さや美しさを表現したいと思い、制作しました。

姚　佳穎　　ねじ込む

絶えず変化する世界の中で、生物たちは様々な影響を受け本来の姿を保ち続けることは難しい。たとえ形や性質が変わってしまっても、歩みを止めることなく変化を受け入れながら生きていく。本作品は、そのような生命の姿と生き抜く意志を形にしたものである。

相澤周作　　良質の孤独、良質の変哲、良質の孤高

ハイエナは、敵としての印象が強く、孤独に思われがちですが実は仲間を想う温かさを持つ存在です。砂鉄や着彩による深みある黒褐色やテラコッタによる荒い造形の痕跡は、生き抜く中で刻まれる経験と変化を示します。上を向き声を放つ姿は、仲間を呼ぶ遠吠えであり、同時に孤高な決意を象徴します。素材の質感と形の力強さを通して、生命の逞しさと儚さ、そして支え合う絆の価値を観る者に伝える ことを意図しました。

相澤周作　　大衆性

黒は光を吸収し、形の凹凸をはっきりと浮かび上がらせるために選びました。無数のとがった形は、一人ひとりの違いや思いを表し ながらも、集まることでひとつの大きな塊になる「大衆」の姿を示しています。近くで見ると個々の違いが分かり、遠くから見ると一体化して見えるようにし、視点によって印象が変わることを意識しました。手作業の跡を残し、そこに存在した人々の痕跡を重ねるよう に制作しています。

唐木和美　　愛犬のタトゥーを入れる青年

悪戯っぽい目を輝かせる青年は自信たっぷりに未来を語る。大胆不敵に飛び石をぴょんぴょん飛んで、自らの道を作っていくのだろう。横腹に愛犬のタトゥーを連れて。そんな眩しい青年を作りたいと思いました。

松本　淳児　　風にきく

たくさんの人との出会いを通して、たくさんの思いとも出会ってきた。一つひとつの出来事は、ふわふわとしたカタチで、自分の中に存在している。それは出会った人たちの記憶でもあり、今の自分をかたちづくる要素でもある。「ふわっ」としているが、確かな「存在感」がある記憶。彫刻のフォルムとして、それが表現できないかを模索し今回の作品となった。

槙　あさ美　　田んぼのサギ

田んぼで餌を探しているサギをイメージしました。何か小さな音がしたようです。そろりそろりと水音を立てずに一直線に歩いています。

稲葉　草平　　曲芸

作品《曲芸》は、アクロバティックなポーズの人物像だ。私にとって彫刻は、無限のフォルムと量感を追求する事で一貫して生命力が宿った作品作りを重視する。本作はフォルムの模索し発見した一つの答えである。腕と足の位置取り を工夫し、花のようなイメージを重ね、造形上の深化を試みた。彩色を黒く金属的な表現をする事により、鑑賞者側の視点として、よりフォルムを強く印象づける事を重んじた。

松丸　弘道　　摂

身の回りにあふれる物や出来事、風や匂いのような見えないものでさえ理(ことわり) があるように思う。 それを形にしたかった。

有賀也寸志　　Alice2025(O脚の悪魔)

木彫で女性像を作り続けています。ここ数年作り続けているAliceシリーズは、自分の夢に向かって 学び挑戦し続けている10代最後の年頃の女性を表現しています。今回は様々な彼女たちの思い の中でふとした可愛い悪魔のような気持ちをコウモリの羽や悪魔の尻尾を装うことで表現してみま した。

塚本　美季　　石

「石を見せる台(テラコッタ)」を軸に、石の持つ性質や素材、成り立ちに着目しながら私の考える石と石そのものをテラ コッタで台として表現した。 石における、マグマ→火成岩→堆積岩・変成岩→私たちの手に渡った石、といった変遷を、テラコッタの部分の下から上にかけて徐々に石に成ってゆく様子と、石の持つ可能性やその存在の重み、神聖さ、身近な存在であるが実は大きな存在であることをイメージして表現した。

伊藤　理吏子　　気脈

心を通わせることの難しさを表現したくて制作しました。気脈は元々血管を意味することから血液細胞をイメージ してつくりました。

加藤宇章　　スミスミブンブン

生まれてまだ日の浅い4人目の孫、すみと。飛行機の様な仕草で一生懸命にのけぞりっている。で視野が広がることが嬉しくて浮かべる満面の笑みが愛おしい。 スミスミ、ブンブン、どこまでも飛んでいけ！

坂元　絵美奈　　夢をみる

人の立ち姿の美しさを改めて考えながら制作しました。タイトルにある『夢』ですが、寝ているときにみる夢、起きているときにみる夢と色々ありますが、どんなときでも夢を抱けることに、人の感覚の豊かさを感じます。人という形に夢限の可能 性を託したいと思って作った作品です。

佐藤あかね　　Mother

猫のお母さんは目をつぶって寝ているようでも、耳を澄まして周りの様子を窺っています。人のお母さんもきっ と同じだと思います。世界のお母さん達を想いながら彫りました。

木村州一　　石鏃・爪痕

67歳で美大生となり、生涯の制作テーマの答えとして生命力が結びつかない石を生き物の尊い命に結びつけられる彫刻に作り変えられないかと言う思いが強くなり、今回の作品はその一つとして制作、はるか遠い昔、一万年間も平和で 豊かな集団生活が続けられた時代が日本にも存在した。その要の一つとして先人達が石を、命をつなぐために動物と 対峙する「鏃」に生まれ変えらせた。その石鏃を先人達の築き上げてきた手と爪痕と大理石に表現した。

中村　健　　フク

この作品はただライオンの首像を作ったというわけではなく、明確に作りたかったモデルが存在する。よこはま動物園ズーラシアで 飼育されている「フク」という愛称の18歳の雄の高齢個体だ。彼が身に纏う雰囲気や体重180キロの大きな体が私にライオンの美しさや力強さをダイレクトに伝えてくれての彼のことが大好きになった。それだけでなく、パートナーの雌「ニノ」にだけ見せる優しい表情などがあり、「ライオン」という生物の中から「フク」という 個が見えてくるのも彼に魅せられた理由の一つだ。 そんな彼も人間換算で70代ほどの高齢となった。あと何年彼の姿と会うことが出来るのかわからない。私は私が魅せられた彼の姿を長く残したかった。私がもし、小説家であればその分筆の中に、彼の姿を文字という形で残しただろうし 科学者であれば彼のカルテを作り、データとして彼の姿を残そうと試みただろう。私は彫刻家である。であれば彫刻として彼の姿を残そうと思った。彼がいなくなってしまった後も私が彼と会うことができるように… 彼を思い出し、彼を感じることができるように。

中村　健　　ニノ

「ニノ」はズーラシアで飼育されている現在12歳の雌の個体である。雄の個体「フク」のパートナである。人間に換算すると25歳前後の年の差のある夫婦だがとても仲が良い。「ニノ」の方が歳下ではあるが「フク」よりも優位に立つ。彼女は120kgの引き締まったたくましい筋肉の美しい体躯を持つ。また、顔に対してのパッチリとした目でまつ毛の長い美人顔のライオンである。私はこの作品に取り掛かる前作で、彼女のパートナーである「フク」の首像を制作している。「フク」が一点で残されると作品の中に込めた彼の魂が大好きな「ニノ」を求めて寂しがるのではないかと考えた。そのため、仲良しの2頭の姿を彫刻として共に遺したいと考えた。私はこの夫婦の間に流れる空気がとても好きだ。お互いに向ける眼差しはとても温かく、人間とは全く異なる感覚を持った別の生物ではあるがどこか人間の愛情に通ずるものを彼らも持っているのではないかと錯覚させる。また、オスと違い鬣がないメスは造形に誤魔化しが効かない。ライオンという生物の形態がしっかりと観察できてなおかつ造形に誤魔化しが効かないメスの個体を造形できてこそ、「ライオンを作れる」と言えると思い、自身への課題としても「ニノ」の制作に取り組むことにした。

上田哲也　　Head Spin

コメントなし

加藤 有造　　潮風の香る街から

コメントなし

藤澤 歩　　心心のインクルージョン

題名の通り宝石におけるインクルージョンをテーマと人の内面的な部分を掛け合わせた作品です。好きな宝石をモチーフにその理由を突き詰めて表現しました。同じ種類の宝石でもインクルージョンまで同じものはなく、それぞれの個性を持っています。それは人がそれぞれの道のりから育つ価値観にも似ていると感じました。